

おばあさんの患者さんが「白い財布がいいと前は聞いていたのに、今日のチラシには黄色い財布がいいと書いてあった」と困惑していた。

これは全ての物事を**木火土金水**の五つ(五行)に分類して見る五行論から来ている。**木**は**火**を生み、**火**は**土**を生み、**土**は**金**を生み、**金**は**水**を生み、**水**は**木**を生む関係がある。青赤黄白黒の五色も五行に分類される。青が**木**、赤が**火**、黄が**土**、白が**金**、黒が**水**である。つまり白い財布は**金**＝「お金」ということになり、黄色い財布は**金**＝「お金」を生むということになる。

丙午(ひのえうま)の迷信も五行論から来ている。十干(甲乙丙丁戊己庚辛壬癸)、十二支(子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥)も五行に対応付けられている。十干の和名(木の兄、木の弟、火の兄、火の弟、..)を見れば、丙は**火**であり、その兄であるから火性が特に強いことが分かる。十二支の午は南の方角を示し、南は**火**である。

つまり丙午は**火**×**火**の年ということで、この年の生まれは激しい性格になるということである。

この五行論が、陰陽論(全ての物事を陰陽の二面に分けてとらえる見方)に結びついたものが陰陽五行論である。

陰陽論の起源は定かではない。だがその本来の内容は太陽と大地がもたらす人への影響、その影響の絡み合いに由来しているとみていいと思う。人がその生きている世界を理解しようとした時に現れる二大存在が太陽と大地である。それが**陽**と**陰**と記号化され、そこに陰陽論が生まれたのだろう。それは混沌たる自然を整理し理解していく為の有効な道具である。それが五行論と結び付けられることで、更に複雑な論理を表現できるようになった。以下、①陰陽→②三才→③四行→④五行と認識が深まる様子を粗述する。

①私たちが生きている世界(地上世界)は大地の気(陰)と太陽の気(陽)で成り立っている。陰は冷やし固める作用があり、陽は温め緩ます作用がある。物質化とエネルギー化。安定化と流動化。・・・相対立する二つの方向が様々な形で平衡し交じり合ったところに全ての物事が生じる。有名な陰陽マークはそれを表しているわけである。

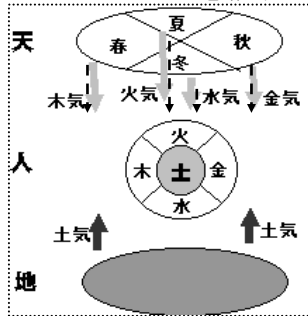
②地上世界は太陽の気と大地の気と、それらに

よって生まれた地上世界の気によって生じているということが出来る。それぞれ**天・地・人**と名付ける。私たちの世界は**天地人**(三才)によって成り立っていると認識できる。

③**天**の気は春夏秋冬で変化する。それぞれの気を**木火金水**と名付ける。**人**(地上世界)は、**地**の気と共に、春夏秋冬にそれぞれ**木火金水**の気を受ける。(四行)

④**地**の気を**土**と言う。季節の変わり目では**天**の**木火金水**の気は弱まり、その分、**土**の気が影響力を増す。土用と言う。特に影響が強いのが、夏と秋の間の土用であり、長夏という。鰻で有名なのはこの土用である。**人**は**木火土金水**＝五行によって成り立っていると考えられる。

この陰陽五行論を背景に天人合一・心身一如の自然観・からだ観が展開されているのが、東洋医学の古典『黄帝内経』である。その一部を意識する。



「天には春夏秋冬があり五行の変化がある。それが万物に生長収蔵の作用を与え、風暑湿燥寒の気候変化が生んでいる。人には肝心脾肺腎の五臓があつて、それぞれの気は怒喜憂悲恐の感情を生んでいる。」

「春の三ヶ月は万物が古い物を押し開いて、新しい物を出す季節。天地間の発生の気が発動して、万物す

べてが榮えてくる。人々は少し遅寝し少し早起し、庭に出てゆったりと歩き、髪を解きほぐし、体をのびやかにし、心持ちは活き活きと生まれたばかりの万物と同様にするのがよい。・・・これが春の気に応じて養生する方法である。逆らえば肝を傷り、夏に寒性の病が生じ、夏の成長を促す気に応ずることが減ってしまう。」

食だけに旬があるのではない。生活全般について季節に合わせた生活が勧められている。同じ**木**である春・生(発生)・風・肝・怒が関連付けられている。

近代科学とは異なるこうした思考の仕方は世界各地に発展し、役立って来た。それらは科学とは違い、自然と人間を分かち、心と身体を分かち思考ではない。黄色い財布のような過剰な応用に注意した上で、そうした思考を見直す時が今、来ているように思う。(2005年2月雨水)

参考：『東洋医学講座1』(小林三剛)、『現代語訳◎黄帝内経素問』(東洋学術出版社版)、『野生の思考』(レヴィ・ストロース)